

佐伯祐三 生誕の地

57

パリを愛した北区ゆかりの天才画家

大正・昭和初期の洋画家・佐伯祐三は中津の生まれ。独特なタッチでパリの風景を描き、30歳という若さで生涯を閉じながらも数多くの名作を残しました。2022年2月2日には、大阪市に寄贈された佐伯祐三作品を原点とする大阪中之島美術館が、いよいよ開館。人々の心を揺さぶる名作の数々が北区で観賞できるようになります。



生家である光徳寺内にある記念碑

短くも激しい天才画家の生涯

佐伯祐三は1898(明治31)年、中津にある光徳寺の次男として誕生しました。17歳頃から油絵をはじめ才能を発揮。現在の東京藝術大学を卒業後の1923(大正12)年末にパリに渡ります。

そこで野獣派のヴラマンク(1876～1958)に「アカデミック!」と批判され、印象派風の穏やかだった画風が一変。パリの街角風景を重厚なタッチで描く独自の作風を確立しました。

一時帰国ののち再び渡仏。鮮やかな色使いと繊細な線描で街角のポスターやカフェなどを描いた名作を次々に生み出しましたが、次第に持病が悪化。愛するパリで30年の短すぎる生涯を終えました。第一次パリ時代以降の創作活動はわずか4年余り。どの作品にも生命を削るかのよう注ぎ込まれた激しい情熱が感じられます。

佐伯祐三生誕の地

▶中津 2-5-4 光徳寺内

MINI COLUMN 中之島に見たパリの風景

「肥後橋風景」は一時帰国時代に描いた貴重な日本風景の代表作。近代都市へと変わりゆく故郷に、愛するパリを投影したのかもしれない。



佐伯祐三「肥後橋風景」(1926年/朝日新聞社蔵)

左から朝日新聞本社、中央郵便局、日本銀行(P11)、大阪市庁舎が描かれている

佐伯祐三の名作が中之島で動き出す

2022年早春にオープン予定の大阪中之島美術館。約40年前に実業家であり美術収集家であった山本發次郎(はつじろう)のコレクションが大阪市に寄贈されたことが誕生のきっかけでした。山本發次郎が熱心に収集した作品を中心に、日本最大級59点の佐伯作品を所蔵します。



CLOSE UP!

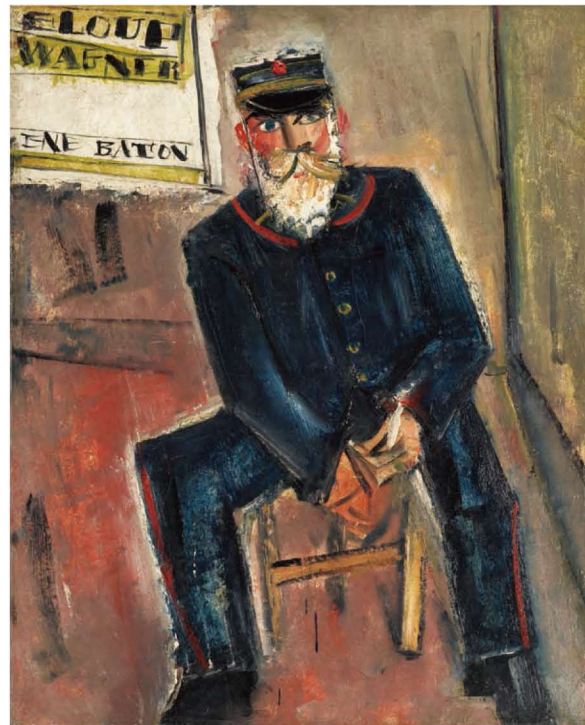
佐伯祐三作品を見るならここ!

大阪中之島美術館 (中之島 4-3)

テーマは「大阪と世界の近代・現代芸術」。山本發次郎の収集作品約600点を含む、6,000点を超える国内トップクラスのコレクションを所蔵しています。北区ゆかりの佐伯祐三の名作、中之島に拠点を置いた具体美術協会のリーダー・吉原治良(1905～1972)の作品、イタリアの画家・モディリアーニ(1884～1920)の裸婦像をはじめ、国内外の作家の様々な芸術が、大阪中之島美術館(P30)で新たに鑑賞できるようになります。

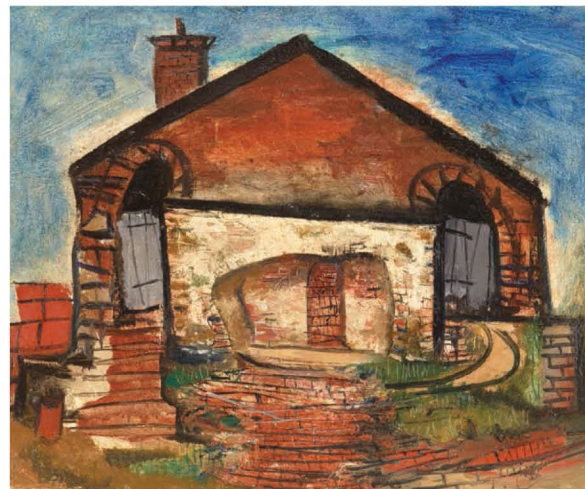


[外観イメージ 大阪市提供 設計: 遠藤克彦建築研究所]



佐伯祐三「郵便配達夫」(1928年/大阪中之島美術館蔵)

代表作のひとつ。1928(昭和3)年3月、すでに床に伏せる日が続いていた佐伯が、偶然訪ねてきた白ひげの郵便配達夫を躍動感あふれるタッチで描いた



佐伯祐三「煉瓦焼」(1928年/大阪中之島美術館蔵)

山本發次郎が衝撃的な出会いを果たした最初の佐伯作品の一つ。パリでの創作に満足できず、田舎の素朴さを求めて滞在したパリ近郊のモラン村で描いたもの。煉瓦焼場の建物が神秘的な輝きを放つ

